

短期大学住居学科におけるリフォーム学の試み その3

— 短期大学生の住意識 —

The Trial of the Housing Renovation in Housing Studies Department Junior College Part3: Residential Consciousness of Junior College Students

浅見 美穂

Miho ASAMI

要約

共栄学園短期大学住居学科では、「リフォーム学」の授業を建築学、住居学など関係諸学の総合的な学問領域として位置づけ、社会制度や実務の実態を踏まえて、より実践的な講座を試みた。理論と実践を反復するため、授業ではよりリアリティを重視した課題を設定した。学生自らの身近な住環境への興味と実態把握の喚起を目的に、第1回めの実習課題で、「あなたの部屋を描いてみましょう」を行った。本稿では、学生たちが描く自分の住環境を分析し、そこから見えてくるものを探ってみた。現代の若者が感じている生活感や住意識を知ることができ、その後の授業展開の示唆を得ることができる。

同時期に行った S 短期大学福祉専攻科や U 短期大学介護福祉科における「家政学概論・実習」の授業では、介護実践に必要な知識という観点から、住生活の意義を理解させ管理する能力と、基礎的な知識と技術を身につけることを目的にしている。それら福祉系の学科での同じ課題の結果を参考にすることで、住居学科の意義や今後の課題が見えてくる。

キーワード：生活、住意識、専門教育

目次

- I はじめに
 - 1 目的
 - 2 対象と方法
- II 課題提出物の分析
 - 1 課題
 - 1－1 課題の概要
 - 1－2 課題の目的と期待される成果
 - 2 提出物
 - 2－1 提出物の概要
 - 2－2 提出物の分析
 - 2－3 作図方法
 - 2－4 スケール感
 - 2－5 家具・持ち物の把握
 - 2－6 表現方法
 - 2－7 お気に入りの場所
- III 住意識
- IV まとめ

I はじめに

1 目的

共栄学園短期大学住居学科「リフォーム学」の授業で、学生たちは、授業中のプリント作業や宿題、課題などを通して、具体的な自分の身の回りの事柄を振り返り、他者の生活を想像することを学ぶ。その一つ一つの作業の中には、学生たちの日頃の生活感や考え方が反映される。

第1回めの課題提出物である「あなたの部屋を描いてみましょう」と「あなたの部屋の写真を撮ってみましょう」を分析し、そこから見えてくる物から、より現実味のある授業の展開方法と、学生たちの住意識を探る。また同時期に行った他の2つの短期大学福祉系学科における「家政学概論・実習」での同じ課題の結果についても参照し、共栄学園短期大学住居学科「リフォーム学」の授業の成果を検証する。

2 対象と方法

選択必修科目の「リフォーム学」の2005年度から4年間の履修登録者は延110名であ

るが、過去3年間（2006年度・2007年度・2008年度）の履修登録者の、提出物が分析可能であった者59名を対象とする。S短期大学福祉専攻科必修科目の「家政学概論・実習」の2008年度の履修登録者は9名である。そのうち、提出物が分析可能な者9名を対象とする。U短期大学介護福祉科必修科目の「家政学概論・実習」の2008年度の履修登録者は36名である。そのうち、提出物が分析可能な者34名を対象とする。以上の5つの講座の授業構成は学科や年度により変えているが、最初の課題は全く同一である。

本稿での分析方法を次に示す。

- ① 学生たちの提出課題を項目毎に評価を行い、傾向や特色をまとめる。
- ② ①から福祉系学生の結果も参照し、共栄学園短大住居学科「リフォーム学」の授業成果を検証し、さらに学生たちの住意識を読み取る。

II 課題提出物の分析

1. 課 題

1-1 課題の概要

最初の課題として取り上げた事例は、これからの学習の基本である人の暮らし：Lifeを理解する手始めとして、自分自身の暮らしを客観的に見つめ直すことを第一歩とした。身の回りの暮らしを取り囲む生活空間を理解するために、キャプション評価手法を用いて、学生自身の部屋の写真を元に所見をまとめさせた（図1）。

部屋にある持ち物を調べることで、一人の人の持ち物の量やその収納の必要性などの気づきとさせた。写真に残すことも、記録として手軽で確実な方法であることを知る。空間と物の大きさ、位置を理解するために、部屋の大きさ（たて・よこの内法、天井高）や窓の位置、家具を採寸し、暮らしのスケール感を確認させた。あらかじめ手本となる作図例を配付し、描き方とスケールの考え方を説明してから作業に入った。

1-2 課題の目的と期待される成果

課題の目的は、簡単な作図方法を学び、スケール感を身につけ、暮らしに対する観察力とこだわりを確認し、なおかつその意図を第三者に伝える能力をトレーニングすることで、プロとしての人材を育成する。フリーハンドで描くことは、気軽に手を動かす習慣をつかさせることを狙いとし、自分の身近なところに学習の題材はたくさんあることに気づかせ

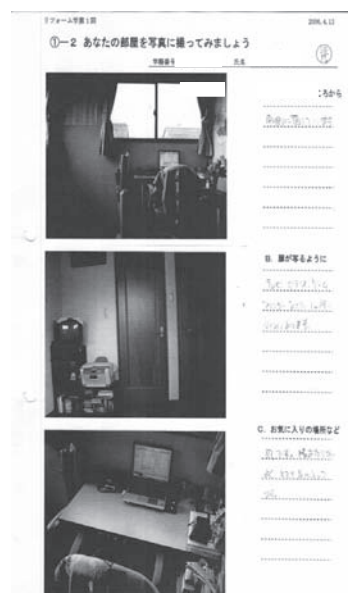


図-1 あなたの部屋の写真を撮ってみましょう

る。

この課題の成果は、客観的に自分の暮らしを見ることで、目的の意識付けと、自分らしさの表現手段であるスキルを身につけることである。

2. 提出物

2-1 提出物の概要

「リフォーム学」の過去3年間（2006年度・2007年度・2008年度）の履修登録者のうち、対象となる提出物が分析可能な者の数は、2006年度は27名、2007年度は20名、2008年度は12名である。S短期大学福祉専攻科の「家政学概論・実習」の対象者は9名、U短期大学福祉援助科の「家政学概論・実習」の対象者は34名である。最初の課題は、第1回の授業時間内に行い、家に持ち帰って確認し、写真と一緒に次週に提出という手順にしている。U短大のみ、作図は家に持ち帰らせず、時間内に提出し、写真は次週に提出としている。

2-2 提出物の分析

分析項目は、前々稿の「その1」でも分析を試みた、「作図方法」、「スケール感」、「家具・持ち物」、「写真・絵による表現方法」に「お気に入りの場所」を加えた5項目とする。作図方法は、壁・戸・窓などの要素を理解し、簡単なルールに基づく表記ができているかを評価する。スケール感は、1/30という縮尺を理解し、自分の部屋の広さや家具の大きさの把握ができているかを評価する。家具・持ち物は、自分の部屋にある家具の配置や、持ち物がどこにどのようなようにあるのかの把握ができているかを評価する。写真・絵による表現方法では、意図を第三者に伝えることができる、わかりやすさや美しさを評価する。

各評価は4段階－A（良くできた）・B（できた）・C（ややできない）・D（できない）とする。

すべての項目でA（良くできた）の作例と、C（ややできない）の作例を示す（図2、図3）。

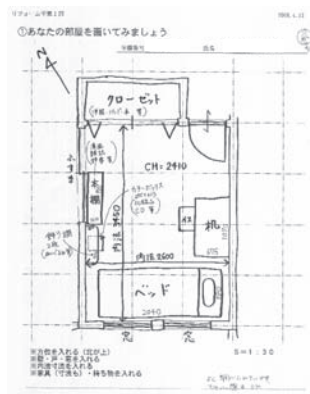


図-2 良くできた作例

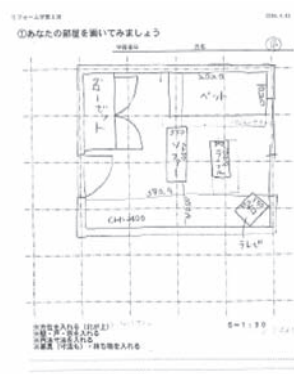


図-3 ややできない作例

2-3 作図方法

作図方法についての各年度、学科の評価結果を示す（図4）。各年度、学科により対象人数が異なるので、評価の結果をパーセントで示す（以下同様）。A（良くてできた）が2006年度から2008年度へかけて上昇し、2008年度ではA（良くてできた）・B（できた）が100%となっている。スケルトンとインフィルの明確な意識ができていともいえるようである。

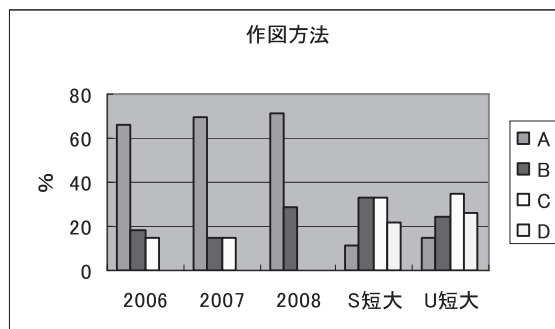


図-4 作図方法

S短大・U短大ではB（できた）・C（ややできない）・D（できない）が多いことから、住居学科での製図の授業などの効果も反映された結果と考えられる。

2-4 スケール感

スケール感についての各年度、学科の評価結果を示す（図5）。スケール感は各学年でバラツキがある。2006年度ではA（良くてできた）・B（できた）が93%で、C（ややできない）はわずかであるが、2007年度、2008年度ではC（ややできない）も30%ほど存在する。Cの多いS短大・U短大に比較すれば、福祉系の学生よりも

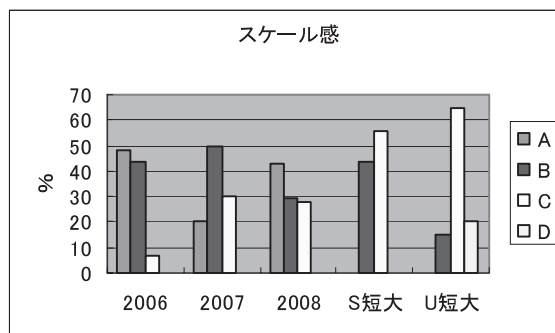


図-5 スケール感

スケール感がある傾向にあると言えるが、住居学科における結果としては、課題が残る。フリーハンドで描くにしても正確な寸法の把握は必要である。中でもベッドの大きさや、机などの奥行き寸法は小さく把握している例が多い。今後のプランニング等の学習にも大きな影響を与える部分であり、基本をしっかりと身につけることが必要である。

2-5 家具・持ち物の把握

家具・持ち物の把握についての各年度、学科の評価結果を示す（図6）。自分の部屋にあるベッドや机、タンスなどの記載と、それに付随する持ち物、収納の中身まで絵や言葉にして表すよう促しているが、家具までで持ち物の把握ができていない例が、C（ややできない）の評価となっている。2006年度から2008年度へかけ

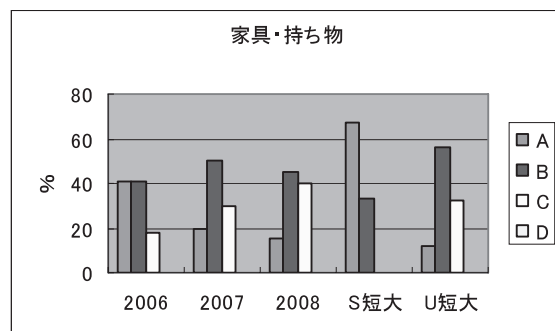


図-6 家具・持ち物の把握

て、A（良くできた）が減少しCが上昇している。細々とした持ち物の洗い出しは面倒な作業であるが、毎日の暮らしに欠かせない要素として是非見直ししてほしいところである。S短大・U短大では、A（良くできた）・B（できた）の比率が高いので、住居学科の学生の、暮らしに対する観察力や意識はまだ弱いと思われる。

2-6 表現方法

表現方法についての各年度、学科の評価結果を示す（図7）。同じ記載内容でも文字が揃っている、壁の部分を濃く描く、彩色する、写真撮影の角度を工夫するなどのちょっとした心遣いによって、より明確に意図を第三者に伝えることができる。それらの工夫がされて、結果として美しい仕上がりになっているか否かを評価している。2006年度ではA（良くできた）が50%弱で2007年度、2008年度ではB（できた）が増え、A（良くできた）は減っている。

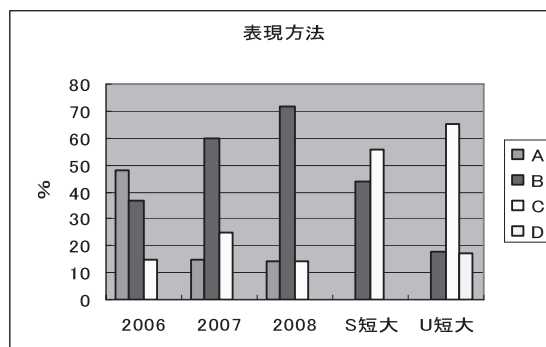


図-7 表現方法

学生どおしの見せ合いなどからプレゼン能力が養われる部分もあるので、他の年度より履修学生の多い2006年度では、学生間のよい相乗効果があったかも知れない。A（良くできた）、B（できた）の割合では2008年度が高くなっており、全体としては表現方法の工夫が約80%以上の学生でできている。S短大・U短大では、C（ややできない）が多いことに比較しても、住居学科の学生はプレゼンへの心遣いをしていることがうかがえる。

以上の4項目の全体の理解度について各年度、学科の評価結果を示す（図8）。各項目についてA（良くできた）とB（できた）の合計の割合を表している。2006年度では、作図方法、スケール感、家具・持ち物把握、表現方法とも、80%以上の学生が理解できている。2007年度、2008年度にスケール感や家具・持ち物把握の理解度が減少している。S短大・U短大では、全体的に理解度が低いのが、家具・持ち物把握は他の項目に比較して高い理解度になっている。生活の観察力は福祉系の学生の得意とする部分であるのかも知れないが、住居学科の学生にも必須な素養である。

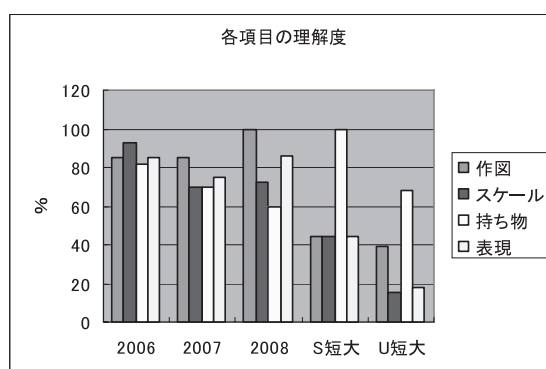
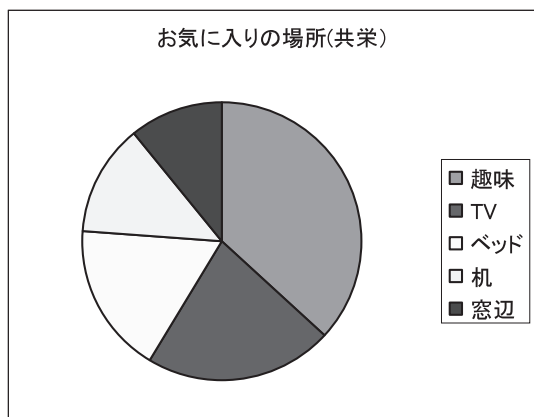


図-8 各項目の理解度

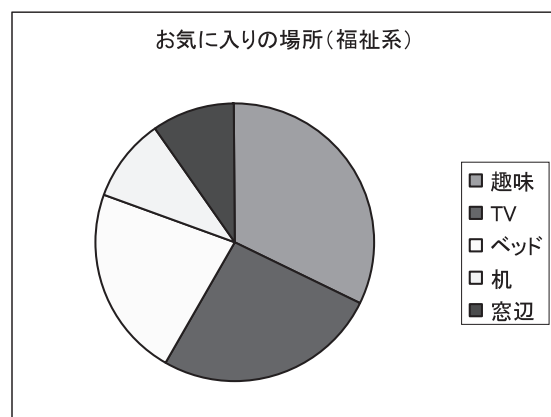
2-7 お気に入りの場所

「あなたの部屋を写真に撮ってみましょう」では、最後にお気に入りの場所を尋ねている。

2006 年度から 2008 年度の分析可能な総数のうち、無回答や「特になし」が 22%あった。彼らは暮らしに対するこだわりがないのか、単に面倒だったのかは不明である。2006 年度から 2008 年度の分析可能な総数の 78%があげた、自分の部屋の中のお気に入りの場所を示す（図 9）。オーディオやぬいぐるみ・アクセサリー、本や CD など自分の趣向のものを飾ったり保管している場所が最も多かった(38%)。それにテレビやその周辺のテーブルなど（22%）、ベッドやソファ（17%）、自分の机周辺（13%）、窓辺（10%）と続いている。この順位は各年度や学科により大きな差はない。兄弟など他の家族と部屋を共有している場合は、特に自分の机やベッド周辺のみがほとんどできる自分だけの居場所のようである。参考に S 短大・U 短大の福祉系の学生のお気に入りの場所を示す（図 10）。



図－9 お気に入りの場所（共栄）

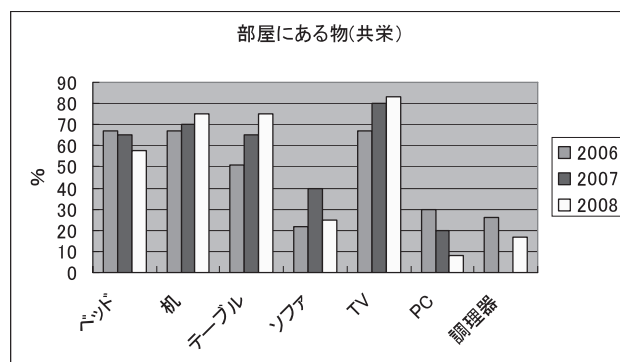


図－10 お気に入りの場所（福祉系）

Ⅲ 住意識

自分の部屋にある物として、学生たちが絵や文字に表し、写真に映し出された物から、彼らの住環境や住意識を探ってみる。本課題では持ち物調査が主題ではなく、学生自身の認識によるパーソナルスペースを構成する要素を読み取るものであるため、実際にはその部屋に存在するかも知れないが学生が認識していない物、あるいは単に書き忘れた物は含まれていない。

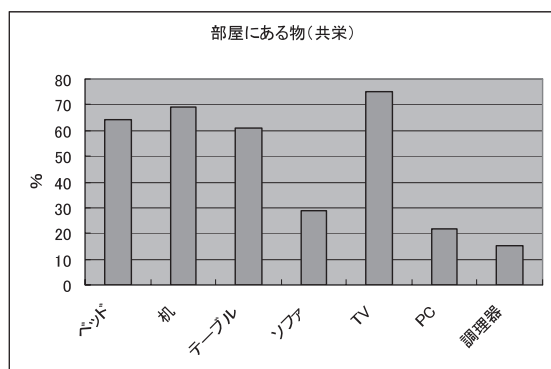
2006 年度から 2008 年度の部屋にある物の主な物を示す（図 11）。ベッドは年度により多少の差はあるが 60%前後の学生が描いている。他の学生は布団を敷いて寝ていると思われるが、布団の位置を描く場合



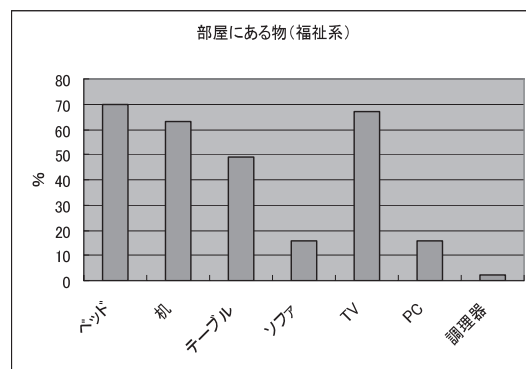
図－11 部屋にある物（共栄）

とない場合とある。机は70%前後の学生が描いている。机がない学生は自分の部屋では勉強などをしないのか疑問であるが、ヒヤリングによると、ちゃぶ台のような小テーブルや炬燵が勉強机を兼ねているようである。これらの総数—テーブルの数は2006年度から2008年度にかけて増えている。ソファは20%～40%と割合としては少ないが、二人掛けの大きさや2脚以上ある場合もあり、自室に友人を招く場面想定もあることを伺わせる。床座と椅子座の生活様式がうまく融合している様子が見て取れる。特筆すべきはテレビの多さである。2006年度から2008年度にかけて増えており、3年間の平均でも75%の学生の部屋にあることを書き表している。中には机はないがテレビはあるという部屋もあるわけで、テレビは学生生活の日常にぴったり寄り添う存在であることがわかる。パソコンは自分専用を自室においている例はまだ少ないという結果だが、小型のノートパソコンを他の文房具と一緒に表現している例もある。冷蔵庫や電子レンジ、炊飯器を自室においている例は、一人暮らしをしている学生のケースである。

部屋にある物を2006年度から2008年度の3年間の総数の割合と、参考にS短大・U短大の福祉系学生の総数の割合を示す(図12、図13)。学生には必須と思われる机が意外に少なく、テレビが多い傾向は同様であることがわかる。



図ー 12 部屋にある物(共栄)



図ー 13 部屋にある物(福祉系)

以上、部屋にある物から学生たちの住環境を想像すると、自分の部屋は勉強したり作業するスペースであると同時に、くつろいだり趣味を行う場でもあり、中には人を招く場としてのしつらえを含んでいる物もある。冷暖房機能などの書き込みもあるところから、設備・機能面はかなり充実している様子が伺える。一方で、自室が多機能であればあるほど、他の家族との接点がなくても済んでしまう危険性もある。数としては少ない(3年間で5ケース)が、他の家族と部屋を共有している中に、暮らし方や自分の居場所の確保を工夫している例もある。他者の暮らしへの気づきや配慮は、普段の日常生活から育まれる部分も多いため、これらの暮らしぶりを客観的に見つめる機会が貴重である。

IV まとめ

リフォーム学での授業中のプリントや宿題・課題は毎回必ず多いのだが、第1回めの「あなたの部屋を描いてみましょう」と「あなたの部屋の写真を撮ってみましょう」は、どの学生も楽しく取り組んでいた。正解を気にしないでよいこと、自分のことを描けばよいこと、描き方が比較的自由であること等の理由であると思う。その反面、自分の背景がさらけ出されることにもなり、大変な意味を持つ課題である。

住居学においては、空間構成や作図の巧拙だけでなく、人の暮らしへの興味や理解の素養が必要である。そしてその基本は、自分の身体と毎日の暮らしの中にたくさん学びの要素があることを、繰り返し学生たちに伝えてきた。その一步が本課題であり、そこから見えて来るものは、今後の住居学や他の学科でも応用・展開できる多くの示唆を含んでいる。今年度をもって終了する共栄学園短期大学住居学科において、意義ある学びの場を与えられたことは大きな喜びである。

最後に、「リフォーム学」の講座を支えてくださった共栄学園短期大学住居学科の教職員の方々と学生の皆様に感謝を申し述べたいと思います。